

クシャーণ朝のインド侵入

宮本 亮 一

はじめに

1世紀中葉、バクトリアの地に勃興したクシャーण朝は、パミールを越えタリム盆地へと侵入する一方、ヒンドゥー・クシュ山脈を越え、インドへもその勢力を拡大した。当王朝は、中央アジアに興った王朝として、史上初めてヒンドゥー・クシュ山脈の南北に亘る広範な地域を支配し、第4代王カニシュカ Kanishka の治世に至って、その領域はガンジス河中流域にまで達した。この広範な領域だけをもってしても、クシャーण朝の出現を、中央アジア史上に於ける一つの画期と云っても過言ではなく、当王朝の歴史を解明することは、以後、中央アジアに勃興した諸王朝の歴史を考察する上でも非常に重要であると考えられる¹⁾。

また、周知のように、クシャーण朝治下では、大乘仏教の興起、ガンダーラ Gandhāra・マトゥラー Mathurā での仏教美術の隆盛といった、文化面での著しい高揚が見られ、これらの宗教・芸術活動に関する研究は、今日に至るまで継続して行われている²⁾。しかし、その文化的高揚を生み出す基盤を形成した当王朝の歴史的展開、歴史的諸事実の確定については、多くの問題が未解決のまま残されている。

日本に於いて、クシャーण朝史の展開は、『史記』『漢書』『後漢書』等の漢語文献中に「月氏」と記された民族との関りの中で扱われてきた³⁾。しかし、小谷仲男による一連の研

1) 間野英二は、クシャーण朝・サーマーン朝・ティムール朝の3王朝を挙げ、

① いずれも、異民族による征服王朝ではなく、中央アジアのオアシス定住地帯を本拠に成立した、中央アジア現地民による国家であること

② これらの国家の時代に、中央アジアの文化の著しい高揚・発展が見られたこと

③ いずれも政治的・軍事的に強力で、中央アジアのみならず、インド、イラン、アフガニスタン等の諸地域をもその支配下に収めたこと

と云う3点から見て、この3王朝の時代を、中央アジア史上に於ける特に重要な時代であると位置付けている [間野 1999: 88, 92]。筆者はサーマーン朝、ティムール朝に関して何ら見識を持ち合わせていないが、クシャーण朝が上記の三点に当て嵌まることはほぼ間違いない。ただし、間野も指摘するように、クシャーण朝に限っては、第一の点に関して、依然不明な点が多く、確定的なことは云えない。

2) クシャーण朝治下で行われた宗教・芸術活動に関する先行研究は膨大な量にのぼり、ここでその全てを列挙することは不可能に近い。特に問題の中心となってきた、仏像の起源問題に関しては高田 1967; 宮治 1997 を参照。この他にも Rosenfield 1967; 宮治 1996 等を参照。

3) 代表的な研究として白鳥 1912; 桑原 1916; 藤田 1916; 同 1927; 羽田 1930; 内田 1938; 松田 1939; 戸

究⁴⁾を除けば、これら諸先行研究は、何よりも「月氏」の民族起源や、その西方移動の過程を考察することに主眼が置かれたものであって、クシャーン朝の動向を追うことを目的としたものではなかった。

敢えて述べるまでもなく、「月氏」と「クシャーン朝」の関係は、中央アジア史上、極めて重要、且つ未解決の問題であるが、現存する資料からこれを解決に導くことは不可能に近いと云う他ない。現時点では、クシャーン朝は、漢語文献で大月氏（月氏）と記された遊牧民族集団に内在した一勢力であった、と捉えるに留めるのがよいのではないだろうか。

他方、海外では、王朝が展開した各地に残された碑文の解読研究が意欲的に行われ、夙に S. Konow が、ガンダーラ語碑文の解読から得た情報に基づき、詳細なクシャーン朝史の展開を論じている [Konow 1929]。また、インドへ侵入したクシャーン朝の拠点であったと考えられるマトゥラー出土の碑文が、H. Lüders によって網羅的に解読されている [Lüders 1961]。しかし、既に S. Konow による研究からはかなりの年月が経過し、この間、バクトリア語碑文といったクシャーン朝史を書き換える重要な資料も発見されている。故に、碑文に基づいた S. Konow や H. Lüders の研究も改めて見直さなければならないであろう。

このような現状に鑑みれば、今後クシャーン朝史を考察する上でも、また、当朝治下で行われた宗教・文化史を考察する上でも、その土台として、現時点に於ける可能な限り詳細な王朝史の展開に関する見取り図を示しておく必要があると思われる。

そこで、本稿では、漢語文献、碑文の両資料に基づく可能な限り詳細なクシャーン朝の歴史的展開を追い、王朝の領域拡大に関する見取り図を提示すると共に、この王朝の支配形態の一端に触れることとしたい。

I 漢語文献から見たクシャーン朝のインド侵入

1 安息・高附・濮達・罽賓への侵入

クシャーン朝が、ヒンドゥー・クシュ山脈を越えて、インドへと侵入した経緯は、『後漢書』巻八八西域傳大月氏國条から概観することができる。

大月氏國は藍氏城に居り、西のかた安息と接すること、四十九日行、東のかた長史の居する所を去ること六千五百三十七里、洛陽を去ること萬六千三百七十里なり。戸十萬、口四十萬、勝兵十餘萬人なり。初め、月氏、匈奴の滅す所と為り、遂に大夏に遷り、其の國を分ちて休密・雙靡・貴霜・盼頓・都密、凡そ五部翕侯と為す。後百餘歲、貴霜翕侯丘就卻、攻めて四翕侯を滅ぼし、自立して王と為り、國を貴霜と號す。安息を侵し、

↙ 内田 1972; 榎 1985; 江上 1987 等が挙げられる。

4) 小谷仲男による一連のクシャーン朝史研究は小谷 1996; 同 1999 を参照。

高附の地を取る。又濮達・鬲賓を滅し、悉く其の國を有す。丘就卻、年八十餘にして死し、子の閻膏珍、代りて王と為る。復た天竺を滅ぼし、將一人を置きて之を監領せしむ。月氏此の後自り、最も富盛と為り、諸國之を稱して皆な貴霜王と曰ふ。漢は其の故號に本づき、大月氏と言ふと云ふ。⁵⁾

ここでは、当該記述に見える一連のクシャーン朝史の展開を、他の漢語文献と照合し、この王朝がインドへと侵入した経緯を検討する。また、その過程で、漢語文献から観取できる当王朝の支配形態についても言及したい。この作業自体が、注目すべき新たな歴史的事実を提示する訳ではないが、次章で考察の対象とする碑文から窺い知ることのできる王朝史の展開と関連する点があるので、当該記述に見える人名・地名・歴史的事件等を一つ一つ確認していくことにしたい。

記述中に見える貴霜翁侯丘就卻は、クシャーン朝の初代王クジュラ・カドフィセス Kujula Kadphises を指すと考えられている⁶⁾。そこで先ず、このクジュラ・カドフィセスの事蹟を追うことから始めたい。

『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条には、クシャーン朝が安息を侵略し、高附の地を奪取したことが記されていた。安息とは、一般にアルシャク朝パルティアを指すと考えられている。しかし、そのアルシャク朝は、『後漢書』卷八八西域傳安息國条に、

安息國は和犢城に居り、洛陽を去ること二萬五千里なり。北のかた康居と接し、南のかた烏弋山離と接す。地は方數千里、小城數百あり、戸口勝兵最も殷盛と為す。其の東界は木鹿城、號して小安息と為す。洛陽を去ること二萬里なり。(下略…)⁷⁾

と見えるのみで、アルシャク朝がクシャーン朝に侵攻されたことが記されていない。ただ、『後漢書』卷八八西域傳高附國条には、

高附國は大月氏の西南に在って、亦た大國なり。其の俗は天竺に似、而して弱く服し易し。賈販を善くし、内は財に富む。屬する所常無く、天竺・鬲賓・安息の三國は強けれ

5) 大月氏國居藍氏城、西接安息、四十九日行、東去長史所居六千五百三十七里、去洛陽萬六千三百七十里。戸十萬、口四十萬、勝兵十餘萬人。初、月氏、為匈奴所滅、遂遷於大夏、分其國為休密・雙靡・貴霜・盼頓・都密、凡五部翁侯。後百餘歲、貴霜翁侯丘就卻、攻滅四翁侯、自立為王、國號貴霜。侵安息、取高附地。又滅濮達・鬲賓、悉有其國。丘就卻、年八十餘死、子閻膏珍、代為王。復滅天竺、置將一人監領之。月氏自此之後、最為富盛、諸國稱之皆曰貴霜王。漢本其故號、言大月氏云。[中華書局本『後漢書』: 2920-2921]

6) N. Sims-Williams は、「卻」の文字が、ソグド語に於いて、固有名詞を表現する際に用いる婉曲接尾辞 *-kk* を使用して、同一人物の名前を二通りに記す場合と同じ状況ではないかと推測し、「卻」が *kujula* の婉曲語形 **kujuk(a)k* に由来するのではないかという可能性を提示した [Sims-Williams 1998: 89; cf. idem 1992: 34-35]。

7) 安息國居和犢城、去洛陽二萬五千里。北與康居接、南與烏弋山離接。地方數千里、小城數百、戸口勝兵最為殷盛。其東界木鹿城、號為小安息、去洛陽二萬里。(下略…) [中華書局本『後漢書』: 2918]

ば則ち之を得、弱ければ則ち之を失ふも、而れども未だ嘗て月氏に屬さず。漢書以て五翁侯の數と為すも、其の實に非ざるなり。後安息に屬し、月氏の安息を破るに及び、始めて高附を得たり。⁸⁾

と見え、確かにクシャーン朝が安息を破り、安息に属していた高附國をクシャーン朝が奪取したことが記されている。旧来、ここに云う高附はカーブル Kabul に比定されているようであるが [cf. Cunningham 1968: 14-16], そもそもカーブルという名称の出現をクシャーン朝期にまで遡ることができるのか、即ち当時カーブルという都城が存在していたのかは不明である⁹⁾。ただし、漢語文献に記された歴史的・地理的状况に鑑みれば、高附は広くヒンドゥー・クシュ南麓を指していたと考えられる。当該地域の主要な都城カーピシー Kāpīsī, 即ちベグラーム Begrām は、その創建がクシャーン朝期にまで遡るとされており、そこからは確実にクシャーンの貨幣が出土している [MacDowall & Taddei 1978: 245]。また、先行するインド・グreek期にも、カーピシーは主要な貨幣鑄造地であったと云うから [Mitchiner 1975: 343-344], ここに云う高附が指し示す地域は、可能性があるとすればカーピシーであろう¹⁰⁾。

しかし、いずれにせよ『後漢書』卷八八西域傳安息國条には、アルシャク朝の領域の東端が、木鹿、即ちメルヴ Merv¹¹⁾ であると記されていることから、メルヴとカーブル、若しくはカーピシーとの間には距離的に余りにも隔たりがあり、この距離を考えると、クシャーン朝が高附國（カーブル or カーピシー？）を奪取したことが事実であったとしても、この事件によって、アルシャク朝の領域がカーブル、若しくはカーピシーから、遙か彼方のメルヴにまで後退したとは考え難いのである。

8) 高附國在大月氏西南，亦大國也。其俗似天竺，而弱易服。善賈販，內富於財。所屬無常，天竺・罽賓・安息三國強則得之，弱則失之，而未嘗屬月氏。漢書以為五翁侯數，非其實也。後屬安息，及月氏破安息，始得高附。[中華書局本『後漢書』：2921]

9) リグ・ヴェーダ Rig-Veda に見える川の一つクバール Kubhā が、カーブル川を指すという説があるが、真偽の程は定かでない [EP²: Kābul]。

10) 白鳥庫吉は、『魏書』卷一〇二西域傳 [中華書局本『魏書』：2275] に「閻浮謁國は、故の高附翁侯なり。」と見えることを根拠に、この「閻浮謁」が、『大唐西域記』卷一二 [T 50: 940 c] に見える「淫薄健」と同一地名であると考え、これを現アフガニスタン、ヤムガーン Yām-gān [Adamec 1972: 190-191] 周辺に比定し、高附の所在地にあてた [白鳥 1912: 24-26]。参考までに E. G. Pulleyblank による再構音 (Early Middle Chinese, 以下 EMC と略す [Pulleyblank 1991]) を見ると、閻浮謁は jiam-buw-?iat, 淫薄健は jim-bak-gian^h となり、共通の原音を写した可能性がある。高附の音 (EMC kaw-bu^h) からは、これをヤムガーンに比定するのは難しいように思われるが、決定的な反証を挙げることは難しい。

11) 木鹿が Zend-Avesta に見える Mouru (Merv) の音写であると指摘したのは F. Hirth である [Hirth 1885: 142-143]。しかし、B. Laufer は、この説に疑問を呈しており [Laufer 1919: 186-187], 木鹿がメルヴを指すと断定することはできないが、決定的な交替代案も存在しないため、ここでは F. Hirth の指摘通りに考えたい。

以上のことから、『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条に見える、クシャーン朝に侵略された「安息」が、所謂アルシャク朝とは別の勢力ではなかったかという推測が成り立つが、決定的な代替案を提示することは難しい。

ここでは、一つの可能性として、この安息國＝インド＝パルティアとする説を提示するに留めたい。このインド＝パルティアという勢力は、1世紀前半からガンダーラ Gandhāra を中心とした西北インドを支配し、80年頃までその支配が継続したと考えられている [Simonetta 1978: 167-168]。クシャーン朝が侵略した安息が、所謂アルシャク朝ではなく、インド＝パルティアを指すとすれば、クシャーン朝は、西北インドへと侵入していたインド＝パルティアを破り、カーブル、若しくはカーピシー地方（高附國）を奪取したことになり、『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条に記されたクシャーン朝史の展開と一致することになる¹²⁾。

次いで、『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条にクシャーン朝の勢力が及んだと記されている濮達の所在地については、諸説があり、明確にその位置を比定することは難しい [cf. Pulleyblank 1983: 78]。一方、麗賓は、この時代はガンダーラ Gandhāra を指すと見てよい [桑山 1990: 43-59]。

2 天竺國・東離国への侵入

次に、丘就卻（クジュラ・カドフィセス）に代わって王となった閻膏珍の事蹟を追いたい。従来、この閻膏珍は、クシャーン朝の王ヴィマ・カドフィセス Vima Kadphises を指すと考えられてきた。しかし、次章で扱うラバタク Rabatak 碑文の発見によって、クジュラ・カドフィセスとヴィマ・カドフィセスの間には、ヴィマ・タクトゥ Vima Taktu という王が存在したことが判明しており、閻膏珍をヴィマ・カドフィセスと考える説は有効性を失った。しかし、閻膏珍が、Vima Taktu の音写であるとも考え難く [Sims-Williams 1998: 90]、ヴィマ・カドフィセス、ヴィマ・タクトゥと、漢語文献に見える閻膏珍との関係は依然不明としなければならない。

さて、『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条に於いて、閻膏珍の治世にクシャーン朝の勢力が及んだと記された天竺は、『後漢書』卷八八西域傳天竺國条に以下のように見える。

12) インド＝パルティアには、その発行した貨幣からゴンドファレス Gondophares、アブダガセス Abdagases、オタネス Otones などの王の名が知られ、タフテ・バーヒー Takht-i-Bāhi 出土のガンダーラ語碑文には、ゴンドファレスの名が見える [塚本 1999: 1005-1006]。彼らはアルシャク朝の貨幣を模造していたとされ [Simonetta 1978: 156; 158]、アルシャク朝と何らかの関係があったと考えて大過ないであろう。桑山正進は、『出三蔵記集』や『梁高僧傳』に見える「安」姓を冠する僧侶（安世高、安玄など）の出自をインド＝パルティアではないかと推測している [桑山 1990: 36]。また、É. de la Vaissière は、中国に移住したソグド人で「安」姓を冠する者の中に、インド＝パルティアを祖先とする者がいたと主張している [Vaissière 2004: 111]。

天竺國は一名身毒，月氏の東南數千里に在り。俗は月氏と同じくも，卑溼にして暑熱なり。其の國は大水に臨む。象に乗りて戦ふ。其の人月氏よりも弱く，浮圖道を脩め，殺伐せず，遂に以て俗と成す。月氏・高附國従り以西，南のかた西海に至り，東のかた磐起國に至るまで，皆な身毒の地なり。身毒は別城數百有りて，城ごとに長を置く。別國數十ありて，國ごとに王を置く。各々小しく異なると雖も，而れども俱に身毒を以て名と為し，其の時皆な月氏に屬す。月氏，其の王を殺して將を置き，其の人を統べさしむ。土は象・犀・瑇瑁・金・銀・銅・鐵・鉛・錫を出し，西のかた大秦と通じ，大秦の珍物有り。又た細布・好氍毹・諸香・石蜜・胡椒・薑・黑鹽有り。¹³⁾

天竺は，ここでは，「一名身毒」「大水に臨む」と見えることから，広くインダス河流域に求めて大過ないであろう¹⁴⁾。

さて，当該記述は，クシャーン朝の支配形態を示すものとして興味深い。先に挙げた『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条には，クシャーン朝による征服後，天竺に配下の將が置かれ統治されたことが記されていた。そして，同様のことが天竺國条にも記されている。この両記述の一致は，つまり，クシャーン朝治下のインダス河流域に於いて，配下の將による間接統治が行われていたことを示していると云えるのではないか。当該記述だけでは，これ以上のことは云えないが，以下に挙げる種々の資料に，当王朝の支配形態を示す内容が見られるので，このことについては折に触れて言及していきたい。

本章の冒頭に掲げた『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条が伝える，クシャーン朝に侵攻された地域は以上である。しかし，『後漢書』卷八八西域傳には，更にこれら諸地域の他に，クシャーン朝の勢力が及んだ地域として，東離國の名が見える。

東離國は沙奇城に居り，天竺の東南三千餘里に在り。大國なり。其の土氣・物類は天竺と同じうす。列城數十，皆な王を稱す。大月氏之を伐ち，遂に臣服す。男女皆な長八尺なるも，而れども怯弱なり。象・駱駝に乗り，隣國を往來す。寇有れば，象に乗りて以て戦ふ。¹⁵⁾

また，『三国志』卷三〇魏書烏丸鮮卑東夷傳の註に引く『魏略』西戎傳には，当該記述と密接に関連する次の記述が見える。

13) 天竺國一名身毒，在月氏之東南數千里。俗與月氏同，而卑溼暑熱。其國臨大水。乘象而戰。其人弱於月氏，脩浮圖道，不殺伐，遂以成俗。從月氏・高附國以西，南至西海，東至磐起國，皆身毒之地。身毒有別城數百，城置長。別國數十，國置王。雖各小異，而俱以身毒為名，其時皆屬月氏。月氏殺其王而置將，令統其人。土出象・犀・瑇瑁・金・銀・銅・鐵・鉛・錫，西與大秦通，有大秦珍物。又有細布・好氍毹・諸香・石蜜・胡椒・薑・黑鹽。[中華書局本『後漢書』：2921]

14) E. G. Pulleyblank は，「天竺」という語が，「身毒」及び『漢書』卷九六上西域傳に見える「天竺」と共に，イラン語の hinduka に由来するとしている [Pulleyblank 1983: 76-78]。

15) 東離國居沙奇城，在天竺東南三千餘里。大國也。其土氣・物類與天竺同。列城數十，皆稱王。大月氏伐之，遂臣服焉。男女皆長八尺，而怯弱。乘象・駱駝，往來隣國。有寇，乘象以戰。[中華書局本『後漢書』：2922]

車離國は一名禮惟特，一名沛隸王なり。天竺の東南三千餘里に在り。其の地は卑溼にして暑熱なり。其の王は沙奇城に治し，別城數十有り。人民は怯弱にして，月氏・天竺撃ちて之を服す。其の地は東西南北數千里，人民は男女皆な長一丈八尺，象・橐駝に乗りて以て戦ひ，今月氏之を役税す。¹⁶⁾

『魏略』は，晋の太康年間（280-289年）の成立であると考えられており [伊藤 1935]，『後漢書』の成立年代よりも古く，当該記述がより正確な史実を伝えている可能性が高い。ここに記された「車離國」と『後漢書』に見える「東離國」が，同一地域を指すことは，記述内容から見て明らかである。また，両記述に見える沙奇（EMC .sai/.se:-kiǎ/ki）は，サーケタ Sāketa（現ファイザバード Faizabād）の音写と考えられ，東離國 / 車離國の所在をガンジス河中流域に求めることができる [cf. Schwartzberg 1992: 21]¹⁷⁾。

ここで注目したいのは，『魏略』に，車離國を征服した勢力として，月氏と天竺の名が併記されていることである。天竺國が，クシャーン朝による征服後，配下の將によって統治されていたことは先に述べたが，当該記述は，当王朝による征服後も，天竺國が一定の力を保持していたことを示しているのではないだろうか。加えて，当該記述には「役税」という語が見える。この語は，所謂「役属」に近い意味で用いられていると考えられ¹⁸⁾，インダス河流域の事例と同様に，ガンジス河流域の国が，クシャーン朝の侵攻後も，ある程度の力を保持していた，つまり王朝による直接支配ではなく，その国で間接統治が行われていたことを示しているのではないだろうか。

3 小 結

以上，『後漢書』巻八八西域傳大月氏國条に見えるクシャーン朝の展開を，他の記述と照合し検討した。大月氏國条の記述は，概ね他の記述と矛盾することはなく，ここに記された一連の展開は，クシャーン朝の歴史的展開をかなり正確に記したものと見做してよい。唯一，クシャーン朝が侵略した「安息」に関して，これを所謂アルシヤク朝と見做すことに疑問が残るのみである。

また，王朝の支配形態に関しては，当王朝治下のインダス河流域，及びガンジス河中流域

16) 車離國一名禮惟特，一名沛隸王。在天竺東南三千餘里，其地卑溼暑熱。其王，治沙奇城，有別城數十。人民怯弱，月氏・天竺撃服之。其地東西南北數千里，人民男女皆長一丈八尺，乘象・橐駝以戰，今月氏役税之。[中華書局本『三国志』：860]

17) 『魏略』に見える「車離國」が「離車國」の誤りであり，更にこの「離車」がリッチャヴィ Licchavi の音写であり，クシャーン朝時代にリッチャヴィ族が，サーケタ周辺に存在した可能性が指摘されている [市川 1997]。

18) 佐藤長は，役属に関して「吐蕃は他種族を征服するとき，その従来組織を破壊することなく，唯支配者との間に確実な支配被支配の関係を設定するに止めたようである。所謂「役属」がそれであって，軍務，労役に定まった人員，物資を提供するのみで他のことはすべて従来支配者に委ねる形態である。」と述べている [佐藤 1958: 285-286]。

で間接統治が行われていた可能性を窺取することができた。この点は、次章の考察からもより明らかになるはずである。

『後漢書』巻八八西域傳は、125年までの出来事を記したものであることから、本章で見たクシャーン朝史の一連の展開はこれより以前のことと考えられる¹⁹⁾。また、正史には、クシャーン朝第四代王カニシュカの名が見えないため、この一連の展開は、カニシュカ即位以前の出来事であると考えられるのである²⁰⁾。

II 碑文から見たクシャーン朝のインド侵入

1 クジュラ・カドフィセス Kujula Kadphises

クシャーン朝史を研究する際、王朝が展開した各地に残された碑文が、漢語文献と並ぶ重要な資料であることは間違いない。しかし、従来の研究、殊に日本の研究に於いては、碑文と漢語文献の双方に基づいて、王朝史の展開が論じられたことはないように思われる。そこで、本章では、前章の内容を踏まえつつ、碑文に基づき王朝史の展開を考察し、加えて、前章と同様に王朝の支配形態についても言及したい。

先ず、クジュラ・カドフィセスの事蹟を伝える碑文として、現パキスタン、スワート Swāt (古ウディヤーナ Uḍḍiyāna) 地方出土の金製薄板を挙げる事ができる²¹⁾。

高貴なる衆、苦行の衆、梵行の衆、良き(?) ストゥーパの、心からの支持者であり守護者である、集合せる両僧伽の足下に (Senavarma は) 頭を着けて敬礼する。君主・Oḍi 王 (Oḍiraya)・Nāvha (?) の主、Senavarma は布告する：この *Ekakūṭa* 塔を建てた彼の王との関係から、この敬虔なる寄進は、私、*kadama* の寄進であり、私は兄

19) 『後漢書』巻八八西域傳には、「班固は、諸國の風土人俗を記し、皆な已に詳らかに前書に備はる。今は建武以後の、其の事の先と異なる者を撰し、以て西域傳と為す。皆な安帝の末班勇の記す所と云ふ。」と見え [中華書局本『後漢書』: 2912-2913]、西域傳の記述が、安帝の末(125年)までの記述であることが判る。このことは、即ち西域傳にその名が見えないカニシュカの即位年代を125年以降に設定しなければならないことを意味する。カニシュカ紀元を含めた中央アジア・南アジアの紀元問題に関する近年の状況を総括した A. D. H. Bivar は、W. E. van Wijk が提示した天文学資料による説に基づき、バクトリア語文書の紀年等を傍証とし、カニシュカ紀元を128年に置く説を採っている [Bivar 2000: 72-74]。これは、漢語文献から導き出される年代とも矛盾せず、極めて説得的な見解である(カニシュカ紀元問題の従来の見解については Basham (ed) 1968; 山崎 1999 も参照)。近年この問題に触れた論考として桑山 2003 が挙げられる。ここでは、「ダイアバー積み」という建築技法の採用年代に基づき、カニシュカの78年即位説が否定されている。

20) ただし、この点に関しては問題があり、次章3節で若干触れることとする。

21) ウディヤーナが、スワート地方北部に当ることは桑山 1987: 211-213 を参照。また、現在のスワート地方北部に、ウディグラム Udigram という地名が存在することからも、ウディヤーナがスワート地方に当ることに問題はない [Salomon 1986: 290]。

Varmaseṇa の名声を凌駕する²²⁾。この *Ekakūṭa* が建てられたとき、そこに、他の者達が私の父や祖父と同じように、巨大な一室を設けたストゥーパを建立した。これは、わたし、Seṇavarma によってなされた。そして、この *Ekakūṭa* には、非常に高い外周 (?) が備え付けられた。完全に備え付けられ、(今) 私はそれを改善する。この *Ekakūṭa* に落雷が(あった)。(落雷)によって燃え上がったストゥーパには損傷が生じ、完全に崩壊した; 世尊の遺骨は置き換えられた; (そして) 奉献銘は破壊された。Iṣmaho 家の出自である Oḍi 王, Utaraseṇa の息子, Vasuseṇa —— 彼がこの *Ekakūṭa* を建立する(した?)。その時、主室には、王の命により世尊の遺骨があった。(わたくし), Ayidaseṇa の息子であり、Iṣmaho 王家の出自であるが故に Oḍi 王である Seṇavarma は、全活力と、全精神と、(そのストゥーパを) 大きく、大規模なものとなしていた他の者達への尊敬(?) と(良き) 意志を傾注しつつ、復元されたその本来の外観を伴って、この遺骨を奉納する; (…中略…)

母と父は難行に勤めている; それ故に、生存する息子があり、(そして自身も依然として) 生存している(私の) 母 Ujhamḍa、及び、(私の) 亡き父、Oḍi 王, Ayidaseṇa は讃えられた。大王・王中の王(maharaja rayatiraya) Kuyula Kataphsa (Kujula Kadphises) の息子である神の子(devaputra)²³⁾ Sadaṣkaṇa は、*aṣmaṇakara* である王族の Suhasoma と共に、戦車と共に、軍隊と共に、馬車と共に、*guṣuraka* たち、*sturaka* たちと共に讃えられた。(私の) 亡き兄、Oḍi 王, Varmaseṇa、生存する皇子 Ajidavarma、及び Ayaseṇa は讃えられた。Bhadaseṇa 王に始まり、(私の) 父方の曾祖父 Diśaseṇa に至るまで、Iṣmaho 王家に生まれた全ての Oḍi 王は讃えられた。全ての眷属は讃えられた。(…中略…)

千年も敵を鎮める君主 Seṇavarma の第 14 年、Śravaṇa 月の第 8 日に、舎利の奉納文は、王族 Lalia の息子 Saṃghamitra によって書かれた; また、それは、meridarch である、Sacaka の息子 Ṣaḍia によって作成された; また、*tiratana* (?) である Prea の息子 Bavesara によって刻まれた(?)。そして、この金薄板は、出納官である Makaḍaka の息子 Valia によって奉納された(?)。[Salomon 1986: 269–272; cf. Bailey 1980; Fussman 1982; 定方 1988; 塚本 2003: 494–504]

銘文中には、クシャーン朝の王クジュラ・カドフィセス(銘文ではクユラ・カタフサ Kuyula Kataphsa)、及びその息子サダシュカナ Sadaṣkaṇa の名が見える。ここから、ク

22) Salomon 2003: 48 に従って、Salomon 1986: 269 から読みを改めた。

23) 普通 devaputra 「神の子、天子」という語は、王の称号の一つとして、その名の前に付されるものである。しかし、スワート出土碑文では、クジュラ・カドフィセス自身ではなく、息子のサダシュカナにこの称号が付されている。この事例が一体何を意味するのかは、現在のところ不明であり、今後の課題の一つとしたい。

ジュラ・カドフィセスの治世に、当王朝の勢力が、スワート地方に及んでいたと考えることができる。スワート地方は、所謂ガンダーラに含まれる地域であり²⁴⁾、当該碑文は、先に挙げた『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条に見える、貴霜（クシャー）の丘就卻（クジュラ・カドフィセス）が罽賓（ガンダーラ）を征服した、という記述を裏付けるものと云える。ただ、銘文中に見える「14年」は、碑文の寄進者セーナヴァルマ *Seṇavarma* 自身の即位紀元 (regnal year) である可能性が高く [Fussman 1982: 44]、碑文が打刻された年代を特定することは難しい。

さて、当該碑文は、王朝の支配形態の一端を示す資料としても興味深いので、ここで少しく論を王朝の支配形態の問題に移したい。先ず、G. Fussman が指摘しているように、当該碑文でクジュラ・カドフィセス自身ではなく、その息子サダシュカナが讃えられているという点、及びこの銘文が打刻された時点で、クジュラ・カドフィセスに *adhvatida* 「死去した」というような語が付されておらず、恐らく生存していたと思われる点から、このサダシュカナが、クジュラ・カドフィセスの代理人、若しくは副王のような存在として、スワート（ウディヤーナ）及び周辺地域で活動していたと考えることができる [Fussman 1982: 43-44]。

更に、寄進者セーナヴァルマ *Seṇavarma* は、*oḍiraya* (*oḍi* の王) の称号を、一方、クジュラ・カドフィセスは *maharaja rayatiraya* (大王・王中の王) の称号を有している。銘文に表れているこの称号の差異は、クシャー朝が、セーナヴァルマの属するイシュマホ *Iṣmaho* 家よりも上位にあったことを示している。そして、銘文の内容からは、イシュマホ家の諸王が、代々「*oḍiraya*」の称号を有し、少なくとも曾祖父ディシャセーナ *Diśasena* の時代からウディヤーナの王であったことが判り、クシャー朝侵入以前からスワート地方に勢力を誇っていたと考えることができる²⁵⁾。

以上の点から、クシャー朝治下に於けるスワート地方の状況を推定すれば、この地方ではクシャー朝の王族が大王に代わって統治を行い、更にその下に、ストゥーパの再建を行い、金製薄板を寄進するだけの経済力を有した地方勢力が存在していた、と云えるであろう。

前章で見たように、『後漢書』卷八八西域傳大月氏國条には、天竺國（インダス河流域）が、クシャー朝配下の「將」によって統治されていたことが記されていた。この配下の將が、スワート出土碑文に見えるサダシュカナと同じような立場の存在であったと考えるなら

24) R. Salomon は、ペシャワール *Peshawār* 周辺を指す狭義のガンダーラに対して、ガンダーラ語の使用やガンダーラ美術の受容を共通の特徴とした地域で、北はギルギット *Gilgit*、西はバーミヤーン *Bāmiyān*、東はタキシラ周辺を含む地域を指す「*Greater Gandhāra*」という呼称を考案した [Salomon 1999: 2-3]。スワートがガンダーラに含まれるという考えはこれに基づくものである。

25) セーナヴァルマの父アイダセーナ *Ayidasena*、兄ヴァルマセーナ *Varmasena*、及びアヤセーナ *Ayaseṇa* の名は、他の碑文からも確認することができる [cf. Fussman 1986; Salomon 2003]。

ば、当王朝の支配形態を、王（大王）、その下に地方に配置された王族（＝漢語文献の將？）、更にその下にイシュマホ家のようなクシャーン朝侵入以前から存在した勢力、という三層の構造からなる形態として捉えることができる。

さて、ここで論を王朝史の展開に戻したい。王朝史の展開に関わる資料として、次にタキシラ Taxila 出土の銀製薄板を挙げることができる。先のスワート出土碑文はクジュラ・カドフィセスの活動年代を明示していなかったが、当該碑文はそれを示す貴重な資料である。

Aya (Azes) の 136 年²⁶⁾、Āṣādha 月第 15 日に、この日に、世尊の舎利が Īmtavhria の子孫で、Bactria の人であって Noaca の都市における住民である Urasaka によって、この世尊の舎利が、Takṣaśilā の Dharmarājikā 僧院複合体に於ける彼自身の菩薩堂に奉納された。大王・王中の王・神の子 (maharaja rajatiraja devaputra) Khuṣaṇa への無病の賦与のために、一切諸仏への供養のために、諸独覚への供養のために、諸阿羅漢への供養のために、一切衆生への供養のために、母と父への供養のために、朋友・親類・血族・血縁への供養のために、彼自身への無病の賦与のために、この汝の正しい喜捨が涅槃へと導かんことを。[Konow 1929: 77; idem 1932; cf. 静谷: 1978; 塚本 1996: 1008-1009]

銘文中に見える maharaja rajatiraja devaputra Khuṣaṇa (大王・王中の王・神の子 Khuṣaṇa) が、クシャーン朝の王であることは疑いないが、この内容からでは、どの王を指し示しているのか判断することは難しい。S. Konow は、これをクジュラ・カドフィセスであると考え、当該碑文の存在を以て、クジュラ・カドフィセスがタキシラに勢力を確立した証とした [Konow 1929: lxiv-lxvi]。筆者は以下に示す根拠により、S. Konow の説を妥当なもの判断する。

先ず、第一の根拠として、タキシラの第 3 都市シルカップ Sirkap から、約 2,700 点に及ぶクジュラ・カドフィセスの貨幣が出土していることが挙げられる [Marshall 1951: 785-786, 792]。これは、クジュラ・カドフィセスがタキシラに勢力を確立した傍証と見做すことができる。更に、マトゥラー出土碑文が示す内容が第二の根拠として挙げられる。

大王・王中の王・神の子 (mahārāja rājātirāja devaputra) Kuṣaṇa の息子、śāhi²⁷⁾ Vema (?). Takṣuma (?) の, bakanapati である Humaṣpala (?) によって、神殿は造立せしめられた。庭園、水槽及び井戸、集会場、通路が (造立された)。[Lüders 1961: 135; cf. 定方 1990: 24]²⁸⁾

銘文中には、「大王，王中の王，神の子 (mahārāja rājātirāja devaputra), Kuṣaṇa の

26) Konow 1932 に従って、冒頭の読みを Konow 1929: 77 から改めた。

27) śāhi という語が見える碑文は、計 4 点存在する [Lüders 1961: 136]。いずれも、王名の前に付されているが、本例を除けば、全てカニシュカ以降の王の碑文に見えるため、この碑文をカニシュカ以前のものとするには、若干の疑問が残る。

28) 当該碑文は、残された銘文が磨耗しており解読が非常に難しいが、ここでは H. Lüders の解読

息子, śāhi Vema] と見える。前章で触れたように、ラバタク碑文の発見によって、クジュラ・カドフィセスの息子ヴィマ・タクトゥの存在が明らかになった今、このヴェーマは、ヴィマ・タクトゥを指すと考えることが可能である²⁹⁾。これらの根拠から、タキシラ出土碑文に見える maharaja rajatiraja devaputra Khuṣaṇa が、クジュラ・カドフィセスを指すと判断して問題ないであろう。

ここで、先のタキシラ出土碑文の紀年が問題となる。S. Konow は、銘文中の「136年」を、古サカ紀元（前84年開始）で換算し、この碑文が打刻された年を52年とした [Konow 1929: lxiv, xc-xci]。しかし、一般に古サカ紀元と称されるこの紀年の開始年は、研究者の間で著しく異なっており、S. Konow の解釈は可能性のある一つの解釈ではあっても、確定的なものではない [cf. Salomon 1998: 181]。更に、古サカ紀元に関する問題を述べるまでもなく、アゼス Azes の即位紀年は、前57/56に開始されるヴィクラマ Vikrama 紀元であることが確実視されており³⁰⁾、「136年」はヴィクラマ紀元で換算し79/80年としなければならない。

更に、タキシラ出土碑文に加えて、S. Konow が、クジュラ・カドフィセスの活動を示すものとして提示した、現パキスタン、パンジタール Panjtār 出土の碑文も、クジュラ・カドフィセスの活動を示すものと判断してよいであろう。

122年, Śrāvaṇa 月の第1日, 大王 (maharaya) Gushaṇa (Kushaṇa) の治世に, Urumuja の子, Moika によって, [Ka?] sua の東の領域は, 吉兆の土地となされた。そして, 私の寄進による二本の木がある。この善行によって無上の幸福なる不滅の土地を…。 [Konow 1929: 70]

当該碑文では, maharaya (大王) の称号が付されているだけであるが, クシャーナ朝の王の名を Gushaṇa (Kushaṇa), Kuṣaṇa と記す碑文が他に存在しないこと, 及び先の maharaja rajatiraja devaputra Khuṣaṇa がクジュラ・カドフィセスを指すであろうこと

↙ を採ることとする。H. Lüders の解読によれば, 王の称号は mahārājo rajatirājo devaputro kuṣaṇaputro と主格形であり, śāhi の後に続く vemataksūmasya は属格形である。定方晟は, これを「大王, 王の王, 神の子クシャーナの息子, シャーヒ, ヴェーマ・タクシュマの…」と訳している [定方 1990: 24]。

29) ただし, このヴェーマは, 従来考えられてきたようにヴィマ・カドフィセスを指す可能性も残されている [Lüders 1961: 137; Rosenfield 1967: 144-145]。J. Cribb は, 銘文中の「vemataksūmasya」を「Vema Takpa-masya」と読めるのではないかと提案し, 一人の人名として捉えたが [Sims-Williams & Cribb 1996: 97], 前註で述べた様にこの碑文の解読は非常に難しく, 確定的なことは云えない。

30) ヴィクラマ紀元は, 現在もインドで使用されており, その紀元元年を西暦に換算すると, 前57/56となる。この頃に新たな紀元を開始し, 更にその死後もその紀元が使用されているものは, アゼス王の紀元しか存在しない。詳細は Salomon 1982; idem 1998: 182; 定方 1997: 27-36等を参照。A. D. H. Bivar は, 先に挙げた論考でヴィクラマ紀元の元年を前58年に置いているが [Bivar 2000: 71], この1年の違いが生じる理由は定かではない。

から勘案すれば、当該碑文における maharaya Gushaṇa (Kushaṇa) も、クジュラ・カドフィセスを指している可能性が高い。また、銘文中に見える 122 年は、先のタキシラ出土碑文と同様にヴィクラマ紀元で換算し、65/66 年とすべきであろう。この解釈が正しいとすれば、この頃にはクシャーン朝の勢力がタキシラ、即ちガンダーラに及んでいたと考えることができる³¹⁾。

碑文から観取できるクジュラ・カドフィセスの活動年代は、タキシラ出土碑文に見える 136 年 (79/80 年) が上限である。ちょうどこの年の出来事として、『後漢書』にクシャーン朝の動向が記されている。そこには、建初四年 (79 年)、疏勒 (カシュガル) 王の忠なる者が班超より離反し、更に康居が忠を援助した為に、班超が康居と親交のあったクシャーン朝に使者を派遣し、疏勒への援助を止めるよう康居に働きかけるように要請したとあり³²⁾、間接的ではあるが、クシャーン朝がタリム盆地にその影響力を行使し始めた状況が記されている。その後、永元二年 (90 年) には、クシャーン朝の勢力が直接タリム盆地へと侵入することとなる³³⁾。

これらのタキシラ・パンジタール出土両碑文、及び漢語文献が示す年代から判断して、クシャーン朝は、タリム盆地への侵入に先がけて、ガンダーラをその支配下に入れていたと考えてよいであろう。

2 ヴィマ・タクトゥ Vima Taktu, ヴィマ・カドフィセス Vima Kadphises

前節で挙げたマトゥラー出土碑文を除くと、現アフガニスタン、ガズニ Ghazni の西方、ダシュテ・ナーウル Dasht-e Nāwūr³⁴⁾ から出土したバクトリア語碑文のみが、ヴィマ・

31) 註 24 参照。

32) 明年 (建初四年)、復た假司馬の和恭等四人を遣はし兵八百を將ひ超に詣らしむ。超因って疏勒・于窰の兵を發して莎車を撃つ。莎車陰かに使を疏勒王の忠に通じ、啖らわすに重利を以てす。忠遂に反きて之に従ひ、西のかた烏即城を保つ。超乃ち更めて其の府丞の成大を立て疏勒王と爲し、悉く其の反かざる者を發して以て忠を攻めしむ。積むこと半歳、而して康居精兵を遣はし之を救はしめ、超下すこと能はず。是の時、月氏新たに康居と婚し、相ひ親しく、超乃ち使を使はして多く錦帛を齎らして月氏王に遣り、康居王に曉示せしむ。康居王乃ち兵を罷め、忠を執へて以て其の國に歸り、烏即城遂に超に降る。[中華書局本『後漢書』: 1579]

33) 『後漢書』卷四七班超傳には、永元二年 (90 年)、クシャーン朝の「副王謝」なる人物が、タリム盆地へと侵入し、班超に撃退されたことが記されている [中華書局本『後漢書』: 1580]。かつて榎一雄は、これとはほぼ同内容の記述が、『後漢紀』卷一三孝和皇帝紀上に見え [中華書局本『後漢紀』: 255]、そこでは「副王謝」が、「王謝」と記されていることに注目し、この王がクシャーン朝の何れの王に当るかを詳細に考察し、その可能性を提示した [榎 1968]。この謝 (EMC zia^h) は、バクトリア語の「shao」を音写したものだという指摘もあるが [cf. 山崎 1999: 37]、何れにしても特定の王に同定することは困難である。ちなみに、山本光朗は、「謝」の原音を Pahl. šahridār, šahryār 「支配者、統治者、副王」等の語に求めている [山本 1999: 35]。

34) ダシュテ・ナーウルの位置は Adamec 1985: 600-601 を参照。

タクトゥの動向を伝えるものである。

279年, Gorpaios 月の第15日。王中の王, 偉大なる救済者, クシャーンの Vima Taktu, 正義の王, 公正なる者, 崇拝に値する神, 彼自身の望みによって王権を手にした者の… [Sims-Williams & Cribb 1996: 95; cf. Fussman 1974: 8-18; Davary & Humbach 1976]

当該碑文から, ヴィマ・タクトゥの治世に, クシャーン朝の勢力がガズニ方面にまで及んでいたことが判る。これは, インドへと侵入していったクシャーン朝の動向と直接的に関わるものではないが, クジュラ・カドフィセスの動向を伝える碑文からは, 判明しなかった事実であり, クシャーン朝の勢力がアフガニスタン西南方面に向かって延びていたことを示すものである。ガズニには, どれだけ遅くともクシャーン朝期から都市が存在していたと考えられているようである [cf. 稲葉 1994: 248-247]。

続くヴィマ・カドフィセスの活動を示す碑文も, 数点知られているが, 碑文の所在地から, 領域の拡大は殆ど見られない。現インド, ハラツツェ Khalatse から出土したガンダーラ語碑文には, ヴィマ・カドフィセスと思われる名 (Uvima Kavthisa), 及び 187 (or 184)³⁵⁾ という紀年が見える [Konow 1929: 79-81]。S. Konow は, 187 (or 184) 年を先と同じく, 古サカ紀元で換算し, 103/104 (100/101) 年としたが, これもヴィクラマ紀元で換算すれば, 130/131 (127/128) 年となる。しかし, 先にこの紀元で換算したタキシラ, パンジタールの碑文とは, その出土地が大きく離れており, 書かれた言語が同じであるという点以外に同じ紀元で換算する根拠はなく, この年代にヴィマ・カドフィセスが在位にあったかどうかは定かではない。

加えて1点, ヴィマ・カドフィセスの活動を示す碑文がマトゥラーから出土しており, そこには「フヴィシュカの祖父…の神殿」というセンテンスが見える [Lüders 1961: 140; 定方 1990: 24-23]。カニシュカの後継者であるフヴィシュカ Huvishka の祖父は, ヴィマ・カドフィセスに当るため, 当該碑文はその活動を示すものと見做すことができる。

さて, 前節で述べたように, クシャーン朝の勢力は, クジュラ・カドフィセスの治世に, ガンダーラまで及んでいた。そして, ヴィマ・タクトゥ (若しくはヴィマ・カドフィセス) の動向を示す碑文からは, その治世の間に, 当朝の領域がマトゥラーにまで急激に拡大したことが判る。両王の治世に及んで, これほど急速に領土を拡大することが可能となったその主たる要因として, クシャーン朝が当時盛んに行われていたローマ～インド間の海上交易に関わる通商ルートを押さえたことが考えられる。

当時のインド洋交易の状況は, 『エリュトラー海案内記』(以下『案内記』と略す)に詳述

35) J. Cribb は, 「187 (or 184)」を「287 (or 284)」の誤刻としているが [Sims-Williams & Cribb 1996: 100], 根拠が明示されている訳ではないので, ここでは S. Konow の解説を採用する。

されている。この『案内記』は、50-70年頃に成立したと考えられている〔蔀 1976; 同 1988〕。この成立時期は、クジュラ・カドフィセスが統治していた時代にあたり、『案内記』はまさに同時代資料である。ここでは、一旦碑文から離れ、『案内記』から窺い知ることができる内陸交易の状況を確認し、クシャーン朝の勢力拡大の要因を検討することとする。

先ず、インダス河に沿った交易ルートの存在を示した『案内記』第39節には、以下のように見える。

さて船はバルバリコンに停泊するが、他方船荷はすべて河を遡り、首府へと王の許に運ばれる。この商業地には、十分な量の純正品の衣服と少量の混紡の品、錦、橄欖石(?)、珊瑚、ステュラックス、乳香、ガラス器、銀器、貨幣、少量の葡萄酒が輸入される。(これらと)交換にコストス、ブデッラ、リュキオン、ナルドス、トルコ石、ラピスラズリ、セーレスの毛皮、絹布、生糸、インディゴが受取られる。インドの(風)に乗って航海するものは、7月、即ちエビービの頃に出航する。この(風)によって航海は困難にはなるが、全き順風に恵まれてずっと短くなるのである。〔蔀 1997: 18-19; cf. Casson 1989: 75〕

当該記述には、海上から齎された交易品が、インダス河口のバルバリコン Barbarikon³⁶⁾から河を遡り、王の居する首府へと運ばれていたことが記されている。ここに云う首府は、『案内記』第38節にミンナガル Minnagar の名で見えるが、具体的な位置は比定されておらず〔村川 1946: 191; Casson 1989: 189〕、実際に交易品がインダス河を遡りどの辺りまで辿り着いたのかを知る術はない。しかし、バルバリコンからの輸出品目中には、バダフシャー Badakhshān で産出されるラピスラズリが含まれていることから〔榎 1977〕、ヒンドゥー・クシュ山中の産物が、河を下って運ばれていたことが判り、インダス河の両方向に沿った交易ルートが存在していたことはほぼ間違いないようである。

加えて、北方の産物が陸路を経由してインド西北部の港に齎されていた様子が、『案内記』第48節に見える。

この地方(バリュガザ)には東の方にオゼーネーと呼ばれる都市があり、そこに曾て王宮があった。そこからこの地方の繁栄や我々との交易を目的とするすべての物が、バリュガザに運び下ろされる。縞瑪瑙、瑪瑙(?)、インド産上質綿布、モロキナ、十分な量の並質の布(がそれである)。またそこを通過して高地から運び下ろされるのは、プロクライス経由で運び下ろされたナルドス、即ちカッパーリネー、パトロパピゲー、カバリテー、それと隣接するスキュティアーを経由してきた(ナルドス)、それにコストスとブデッラである。〔蔀 1997: 23; cf. Casson 1989: 81〕

36) 『案内記』の記述内容から、バルバリコンの所在地がインダス河口にあたることは明らかだが、現在のところ、この港に相応する遺跡は発見されていない〔村川 1946: 198; Casson 1989: 188; 蔀 1999: 140〕。

ここでは、プロクライス Proklais といった北方地域を經由して³⁷⁾、オゼーネー Ozēnē (現ウッジャイン Ujjain) に齎された交易品が、バリュガザ Barygaza (現ブローチ Broach) に運ばれていたことが記されている。当然、オゼーネーからバリュガザへと至るには、ナルマダー Narmadā 河を下ることになる。また、『案内記』第 64 節には、ティーナ Tina (中国) の産物が、バクトラ Baktra (現バルフ Balkh) を經由してバリュガザへと齎されていたことが記されており³⁸⁾、恐らく同様のルートをとったものと考えられる [蔀 1999: 140]。

これらの状況から勘案すると、クジュラ・カドフィセスの治世にガンダーラへと侵入したクシャーン朝が、『案内記』に見える交易ルートを押さえたことによって、ヴィマ・タクトゥ (若しくはヴィマ・カドフィセス) の治世に至って大きく発展したと考えることができる。そして、領域がマトゥラーにまで拡大したのは、ここに挙げた二つの交易ルートのうち、後者のルートを押さえようとしたことに起因すると考えることができる³⁹⁾。

3 カニシュカ Kanishka

先ず、カニシュカの事蹟を伝える最も重要な資料として、現アフガニスタン、ラバタク⁴⁰⁾ から出土したバクトリア語碑文が挙げられる。

偉大なる救済者、Kushan の Kanishka、正義の王、公正なる者、神として崇拝に値する君主の…彼は Nana 及び全ての神々から王権を手にし、神々が望んだために、紀元 1 年を開始した。そして彼はギリシア語の勅令を發布し、それをアールリア語に改めた。紀元 1 年、それはインドに対して、全てのクシャトリアの王国に対して公布された——Wasp, Sāketa, Kauśāmbī, Pāṭaliputra, Śrī-Campā にまで——それがいかなる支配者、他の勢力であろうと、かれら全てを、そして全インドをその意志のもとに服従させた。そして、Kanishka 王は、この…で、*karalrang* の Shafar へ、王家の平野に、ここではその奉仕を栄光の Umma が行う神々 (即ち)：上述の Nana、上述の Umma、慈

37) プロクライスは、ストラボンに、ペウコライティス Peukolaitis として見え [飯尾 1994: 396]、プトレマイオスは、ポクラエイシς Poclais の名でガンダーラの一都市として挙げている [中務 1986: 117; cf. 村川 1946: 205]。スワート川左岸のチャールサダ Chārsada に比定する説がある [Casson 1989: 204]。

38) 「この地方の彼方では、今や真北の方角で外側の海が或るところで尽きると、そこにティーナと呼ばれる非常に大きな内陸の都市があり、そこから真綿と生糸と絹布が、バリュガザへとバクトラを經由して陸路で、他方リミュリケーへとガンゲース河を通じて運ばれる。(下略…)」 [蔀 1997: 28; cf. Casson 1989: 91]

39) 蔀勇造は、『案内記』第 47 節に見える「バクトリアノイ」なる種族がクシャーンに当り、当時はまだガンダーラにまでその勢力が及んでいなかった、としているが [蔀 1999: 141; cf. Casson 1989: 204]、前節でみたように『案内記』の成立年代の間にクシャーン朝は既にガンダーラへと侵入している。

40) ラバタクの位置は Adamec 1972: 142 を参照。

悲深き者 Aurmuzd, Sroshard, Narasa, そして Mihr のために, B…ab と呼ばれる神殿を建立するように命じた。(挿入文:そして彼は Mahāsena と呼ばれ, そして彼は Viśākha と呼ばれた) そして彼は, 同じ者; (即ち) ここに記された神々の彫像を制作するように命じ, また, 諸王の彫像を制作するように命じた: 曾祖父 Kujula Kadphises 王, 祖父 Vima Taktu 王, 父 Vima Kadphises 王, そして Kanishka 王自身のために。その時, 彼は王中の王, 神々の子孫として, その遂行を命じ, *karalrang* の Shafar がこの神殿を建立した。…*karalrang* の…と *karalrang* の Shafar, *ashtwalg* の Nukunzuk とが, 王の命令を遂行した。ここに記された神々——彼らが王中の王, Kushan の Kanishka に, 永遠の健康, 幸福, 勝利を保持せんことを, そして, 神々の子がその紀元 1 年から 1000 年まで全インドを支配せんことを。…神殿は紀元 1 年に創設された; そして紀元 3 年に完成した。…王の命令により, 多くの儀式が行われ, 多くの参列者が集められ, 多くの…王は神々に贈物を捧げ, そしてそれらの神に捧げられた…については… [Sims-Williams 1998: 81-83; cf. Fussman 1998]

ここには, カニシュカの勅令が公布された地域として, ワस्प *Wasp⁴¹⁾, サーケタ, カウシャーンビー Kauśāmbī, パータリプトラ Pāṭaliputra, シュリー・チャンパー Śrī-Campā の名が見える。以下に, これを手掛かりに, カニシュカの治世に於けるクシャーン朝の領域について検討したい。

『後漢書』巻八八西域傳東離國条, 及び『魏略』西戎傳車離國条に見える沙寄が, サーケタを指すことは前章で述べた。更に, ラバタク碑文と併せて考えると, カニシュカの治世に, クシャーン朝の勢力がサーケタにまで及んでいたことは確実と云える。しかし, この事実は, 『後漢書』巻八八西域傳にカニシュカの名が見えないことと矛盾する。このため, 『後漢書』巻八八西域傳の記述には, カニシュカの治世の出来事が含まれていると推測することができるが, この点に関しては今後の課題としたい。

更に, ラバタク碑文中でサーケタに次いで挙げられているカウシャーンビー (現コーサム Kosam) からは, カニシュカの名を刻んだ碑文が出土している。

大王 Kaṇiṣka の第 2 年, 夏季第 2 月第 8 日に, 三藏受持者 Buddhamitrā 比丘尼が菩薩 (像) を世尊・仏陀の経行処に造立せしめた。[塚本 1996: 631]

ラバタク碑文, 及び当該碑文から, カニシュカの治世初期にクシャーン朝の勢力が, カウシャーンビーまで及んでいたと判断できる。また銘文に見える, ブッドミトラ Buddhamitrā の名が, サールナート Sārnāth (現ヴァーラーナシ Vārānasi) 出土碑文に見える。

41) N. Sims-Williams は, $\alpha(\sigma)\pi\omicron$ と判読し, OIr. *Huwaspā-のバクトリア語相当語句ではないかと推測した [Sims-Williams 1998: 84]。しかし, N. Sims-Williams は, この読みを不完全なものとしているので, ここでは考察の対象から外すことにする。

大王 Kaniṣka の 3 年、冬季第 3 月 22 日、以上の日に、Puṣyavuddhi (Puṣyavṛddhi) 比丘の共住者で三蔵に精通した Bala 比丘が、母と父と共に、親教師・軌範師で、共住者である弟子と共に、三蔵に精通した Buddhāmitrā と共に、kṣatrapa Vanaspara と Kharapallāna と共に、四衆と共に、一切衆生の利益・安樂のために、Vārāṇasī の世尊の経行処に、この菩薩（像）と支柱を伴う傘蓋を造立せしめた。[塚本 1996: 897; cf. Salomon 1998: 270-272]

カウシャーンビー出土碑文、及び当該碑文から、ブッダミトラなる僧が、カウシャーンビー～サルナート間を移動していたことが判り、ここから、王朝の勢力が、カニシュカの治世初期に、サルナートにまで及んでいたと考えることができる。

また、銘文中に見えるプシャブッディ Puṣyavuddhi 比丘、及びバラ Bala 比丘の名が、サヘート・マヘート Saheṭh Maheṭh 出土碑文に見える。

…第 19 日に。以上の日に、(この) 菩薩（像）と傘蓋と支柱が、Puṣyavuddhi (Puṣyavṛddhi) 比丘の共住者である三蔵受持者 Bala 比丘の寄進であって、Śāvastī (Śrāvastī) の Kosamba 堂の世尊の経行処において、Śarvastivādin (Śarvāstivādin) の軌範師たちの所領として（造立された）。[塚本 1996: 700-701]

サルナート碑文、及び当該碑文より、バラ比丘が、サルナート～サヘート・マヘート間を移動していたことが判る。更に、クシャーン朝の勢力が確実に及んでいたと考えられるサーケタ出身者の名が、クシャーン朝期ブラーフミー文字で刻まれたサヘート・マヘート出土碑文に見える。

(この仏像は)、Sāketa の住民で衣服製造業者である Sihadeva (Siṃhadeva) の寄進物である。[塚本 1996: 701]

これらの碑文から、カウシャーンビー～サルナート～サーケタ～サヘート・マヘート間のルートが機能していた、つまりこれらの地域がクシャーン朝治下にあったと判断して良いであろう。

ラバタク碑文には、カニシュカの勅令が発布された地域として、更に東方のパートリプトラ（現パトナ Patna）、シュリー・チャンパー（現バーガルプル Bhāgalpur）が挙げられていたが、管見の及ぶ限りでは、これらの地域からは、カニシュカの名を冠した碑文は出土しておらず、現時点では、カウシャーンビー～サルナート～サーケタ～サヘート・マヘートを結んだ地域が、カニシュカの治世に於ける領域の東端であったと判断すべきであろう。そして、カニシュカ以降の王（フヴィシュカ、ヴァースデーヴァ Vasudeva）の名を刻んだ碑文が、マトゥラー以东から発見されていないことから⁴²⁾、この領域が、カニシュカの治世一

42) フヴィシュカの 35 年の日付が刻まれた碑文が、ラーカヌー Lākhanū から出土しているが [塚本 1996: 633-634]、マトゥラーから然程離れておらず、その周辺地域に含まれると見做してよいであろう。

代のものであり、クシャーン朝の最大版図であったと考えることができるであろう。

さて、ここで再びクシャーン朝の支配形態に論を移したい。当時の碑文には、(mahā) kṣatrapa という称号を冠した人物の名が見られる。周知の通り、kṣatrapa は、一般に「太守、総督」と訳され、王の代理人として地方を管轄する者の称号 OP. xšaça-pāvan に由来する語である。当然、この語はイラン語の原義のまま用いられていた訳ではなく、インドに於いては完全に独立した王の称号としても用いられるようになる [Salomon 1974]。ただし、クシャーン朝治下に於ける (mahā) kṣatrapa はそれとは異なる。なぜなら、先のサールナート出土碑文に見えるヴァナスバラ Vanaspara, カラパラーナ Kharapallāna⁴³⁾を始め、その名を刻んだ碑文全てに於いてカニシュカの紀年が採用されており、この事実から考えれば、(mahā) kṣatrapa は、クシャーン朝の支配下において王に代って地域支配を担っていた存在——つまりイラン語の原義に近い存在——であったと見做すことができるからである。また、(mahā) kṣatrapa の称号を冠する者の存在は、クシャーン朝の侵入以前から見られるため⁴⁴⁾、クシャーン朝治下に於ける (mahā) kṣatrapa は、本章1節で見たスワート出土碑文に記されたイシュマホ家と同様の存在、つまり、クシャーン朝の侵入以前から存在した勢力であったと考えることができる。このことを踏まえて、現パキスタン、マーニキアラ Mānikiala 出土の碑文に注目したい。

18年、Kārttika 月第20日、以上の日に、大王 Kaṇeṣka (Kaniṣka) の治世に、Guṣaṇa (Kuṣāṇa) の王統における御曹司、kṣatrapa Veśpaśi の施主である、将帥 Lala——彼は彼自身の僧院における施主である——は、そこに数個の世尊仏陀の舍利を奉納した。三者と共に：Khudacia の人 Veśpaśi と、僧院造営者 Burita と、全ての仲間と共に。この善根によって、諸仏と声聞たちと共に、(私の) 弟 Svarabuddhi に、常に最上の分け前のためとならんことを。(また) 造営監督 Budhila にも。[Konow 1929: 150; cf. 塚本 1996: 984]

銘文中には、寄進者として、クシャーンの王統に属するララ Lala, 更に kṣatrapa ヴェースパン Veśpaśi の名が見える。これは、本章1節で挙げたスワート出土碑文と同様の状況——つまりここに云うララが、スワート出土碑文に於けるクジュラ・カドフィセスの息子サダシュカナに当り、kṣatrapa ヴェースパンがイシュマホ家の諸王に当る——を伝えていると考えられ、いっそう確実に、クシャーン朝の支配形態が、王、その下に地方に配置された王族、更にその下に王朝侵入以前から存在した勢力、という三層の構造であったことを示している。

43) 当該碑文は、巨大な菩薩像の上に置かれた傘蓋に刻まれた銘文であるが、この傘蓋が置かれていた菩薩像の銘文では、Kharapallāna は、mahākṣatrapa の称号を有している [塚本 1996: 898]。

44) 詳細は、R. Salomon による (mahā) kṣatrapa に関する網羅的な研究を参照 [Salomon 1974]。

おわりに

先に挙げたラバタク碑文以外にも、クシャーン自身の言語であるバクトリア語で記された碑文が、主としてヒンドゥー・クシュ山脈以北の地から発見されていることから、クシャーン朝は、インドへと侵入しつつも、ヒンドゥー・クシュ山脈の北側、所謂バクトリアでも依然として勢力を保持していたと考えられる。

これらのバクトリア語碑文では、現アフガニスタン、スルコ・コタル Surkh Kotal 出土の碑文が最も重要であり [cf. Mariq 1958; Henning 1960; idem 1965; Gershevitch 1966; idem 1979 etc.], 当該碑文には、「敵からの攻撃」に言及する箇所があることが指摘されている [cf. Sims-Williams 2000: 190, 195]⁴⁵⁾。スルコ・コタル碑文にはカニシュカ紀元 31 年の紀年が見える。A. D. H. Bivar の解釈に基づき、カニシュカ紀元の開始年を 128 年とすれば、この 31 年は 159 年となる [Bivar 2000: 72-74]。この「敵からの攻撃」が一体どのような歴史的事実と結びつくのかが大きな問題となるが、詳細は今後に譲りたい。

この他にも、クシャーン朝の動向と関するバクトリア語碑文として、現アフガニスタン、ディルベルジン・テベ Dilberjin Tera 出土の碑文 [cf. Лившиц & Кругликова 1979], 更にアム・ダリア以北、現ウズベキスタン、アイルタム Ayrtam 出土のフヴィシュカの名を記した碑文を挙げるができる [cf. Тургунов, Лившиц & Ртвеладзе 1981; Harmatta 1986]。このアイルタム出土碑文の存在は、クシャーン朝の勢力がフヴィシュカの治世に、アム・ダリア以北にまで及んでいたことを推測させる。しかし、土器の形状から、アム・ダリア南北の交流について分析した岩井俊平によれば、北バクトリア（アム・ダリア以北）では、クシャーン朝に先行するグレコ・バクトリア時代から、スタンプ装飾を施した土器が出土するのに対して、南バクトリア（アム・ダリア以南）では、3 世紀後半になって初めてそれが表れ、以後アム・ダリア南北の土器に於ける関係が継続するという [岩井 2002]。つまり、3 世紀後半頃から、南北バクトリアで人々の積極的な交流が始まったと考えられ、クシャーン朝の勢力が直接アム・ダリア以北に及んでいたのかどうかという問題はなお検討の余地があろう。

この問題も含め、クシャーン朝がバクトリアの地でどのように展開していたのかは殆ど明

45) 碑文 4～5 行目にかけて「そして、敵達からの攻撃があった時、その時、神々はその座から退いた (*οδο καλδο ασο λρουομινανο ιειρο σταδο ταδο ι βαγε ασο ι νοβαλμο φροχορτινδο*)」, 14～17 行目にかけて「そして、敵達からの攻撃があった時、その時、神々がその座から退かぬように、そしてこの城砦が放棄されぬように (*οδο καλδανο ασο λρουομινανο ιειρο βοοημο ταδανο ι βαγε ασο ι νοβαλμο μα φροχοαρνδημο οτανο μα λιζο μα πιδοριχημο*)」というセンテンスが見える [cf. Henning 1960; Gershevitch 1979; 吉田 1992; Sims-Williams 2000: 23-29, 190, 195]。

らかになっていない。近年、岩井俊平によって、クシャーン朝が展開した当該地域の考古学的研究が意欲的に行われており [岩井 2002; 2003; 2004; 2005], これらの成果を踏まえた上で研究を進めていくことも今後の大きな課題の一つであろう。

最後に、漢語文献、及び碑文から窺い知ることができたクシャーン朝史の展開を整理して、結びとしたい。

先ず、クシャーン朝の勢力は、クジュラ・カドフィセスの治世にタキシラまで及んだ。その年代は、79/80年頃であり、漢語文献にクシャーン朝が間接的にタリム盆地に政治的影響力を行使していたことが記される年（建初四年/79年）と一致し、クシャーン朝は、タリム盆地への侵入に先がけて、ガンダーラを支配下に入れていたと考えることができる。次にヴィマ・タクトゥ、ヴィマ・カドフィセスの治世に、支配はマトゥラーまで拡大した。その主たる要因は『エリュトラ海案内記』の記載から見て、クシャーン朝が当時行われていた海上交易に関するルートを押さえようとしたことによると考えられる。続くカニシュカの治世に至り、王朝は最大版図をその支配下に収めた。その領域の東端は、カウシャーンビー〜サルナート〜サーケタ〜サヘート・マヘートを結ぶ地域であった。また、王朝の動向を伝える諸資料が示すクシャーン朝の支配形態は、王、その下に地方に配置された王族、更にその下に在地勢力、という三層の構造であった。ただ、この支配形態に関しては、三層の構造であったことを提示したが、これが一体何を意味するのかを言及するに至らなかった。この問題を解決するには、後代、当該地域に展開した遊牧民勢力の支配形態にも考察の対象を広げ、それらと比較することも有効な手段の一つと考えられる。今後の課題としたい。

[付記]

本稿は、2005年1月、龍谷大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。修士論文執筆時よりご指導下さっている間野英二先生、佐藤智水先生に心から感謝申し上げます。また、筆者の修士論文をご一読下さり、ご指導・ご指摘いただき、更に貴重な文献を複写させていただいた吉田豊先生にも、深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

HPGA : *Historical and Political Gazetteer of Afghanistan*

T: 大正新修大蔵経

Adamec, L. W. (1972) *Badakhshan Province and Northeastern Afghanistan*. HPGA 1. Graz.

Adamec, L. W. (1985) *Kabul and Southeastern Afghanistan*. HPGA 6. Graz.

Alram, M. (1999) Indo-Parthian and early Kushan chronology: the numismatic evidence. In: Alram, M. & D. E. Klimburg-Salter (eds) *Coins, Arts and Chronology. Essay on the pre-Islamic history of the Indo-Iranian borderlands*. Vienna, 19-48.

- Bailey, H. W. (1980) A Kharoṣṭhi Inscription of Senavarma, king of Odi. *JRAS*, 21 – 29.
- Basham, A. L. (ed) (1968) *Papers on the Date of Kaniska*. Leiden.
- Bivar, A. D. H. (2000) A Current Position on Some Central and South Asian Chronologies. *Bulletin of the Asia Institute* 14, 69 – 75.
- Casson, L. (1989) *The Periplus Maris Erythraei*. Princeton.
- Chavannes, E. (1905) Les Pays D'occident D'après Le Wei-Lio. *T'oung Pao* 6, 519 – 571.
- Chavannes, E. (1907) Les Pays D'occident D'après Le Heou Han Chou. *T'oung Pao* 8, 149 – 234.
- Cunningham, A. (1963) *Ancient Geography of India*. Varanasi.
- Davary, G. D. & H. Humbach (1976) Die baktrische Inschrift IDN 1 von Dasht-e Nāvūr (Afghanistan). *Abhandlungen der Geistes und Sozialwissenschaftlichen Klasse der Akademie der Wissenschaften und der Literatur*, Mainz, Wiesbaden.
- 江上波夫 (1987) 中央アジアの東西交易と文化交流 江上波夫 (編) 『中央アジア史』世界各国史 16 山川出版社, 177 – 316.
- Enoki, K. (1959) The Yüeh-shin-Scythians Identity: A Hypothesis. *International Symposium on History of Eastern and Western Cultural Contacts*. 227 – 232.
- 榎 一雄 (1968) 月氏の副王謝 —— クシャン王朝年代論に関する一臆説 —— 『オリエント』 10, 1 – 15.
- 榎 一雄 (1977) バダクシャンのラピス・ラズリ 『月刊シルクロード』 3 (7・8・9), 10 – 14, 9 – 13, 9 – 13.
- 榎 一雄 (1985) 禺氏辺山の玉 『東洋学報』 66 (1 – 4), 109 – 132.
- Fussman, G. (1974) Documents epigraphiques Kouchans. *BEFEO* 61, 1 – 75.
- Fussman, G. (1982) Documents epigraphiques Kouchans (III), L'Inscription Kharoṣṭhi de Senavarma, Roi D'oḍi: Une Nouvelle Lecture. *BEFEO* 71, 1 – 46.
- Fussman, G. (1986) Documents epigraphiques Kouchans (IV), Ajitasena, Pere de Senavarma. *BEFEO* 75, 1 – 14.
- Fussman, G. (1998) L'inscription de Rabatak et l'origine de l'ère Śaka. *JA* 286, 571 – 651.
- 藤田豊八 (1916) 月氏の故地とその西移の年代 『東洋学報』 6 (3), 329 – 367.
- 藤田豊八 (1927) 西域研究 (第四回) 『史学雑誌』 38 (4), 335 – 352.
- Gershevitch, I. (1966) The well of Baghlan. *Asia Major* 12, 90 – 109.
- Gershevitch, I. (1979) Nokonzok's well. *Afghan Studies* 2, 55 – 73.
- Gershevitch, I. (1983) Bactrian Literature. *The Cambridge History of Iran* 3 (2), Cambridge, 1250 – 1258.
- 羽田 亨 (1930) 大月氏及び貴霜について 『史学雑誌』 41 (9), 1025 – 1054.
- Harmatta, J. (1964) The Great Bactrian Inscription. *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 12, 373 – 471.
- Harmatta, J. (1986) The Bactrian Inscription of Ayrtaṃ. In: Schmit, R. & P. O. Skjærvø (ed) *Studia Grammatica Iranica*. Munich, 131 – 146.

- Harmatta, J. (1994) Language and Literature in the Kushan Empire. In : Harmatta, J. (ed) *History of Civilizations of Central Asia 2*. UNESCO, 417 - 440.
- 春田晴郎 (1998) イラン系王朝の時代『岩波講座世界歴史』2 岩波書店, 61 - 93.
- Henning, W. B. (1960) The Bactrian Inscriptions. *BSOAS* 23, 47 - 55.
- Henning, W. B. (1965) Surkh-Kotal und Kaniška. *ZDMG* 115, 75 - 87.
- Hirth, H. (1885) *China and the Roman Orient*. Leipsic.
- 市川良文 (1997) 『後漢書』西域伝に見える「東離国」について —— 特にクシャーンとの関わりを中心として —— 『東洋史苑』48・49, 10 - 33.
- 飯尾都人 (1994) 『ギリシア・ローマ世界地誌』II (訳) 龍溪書舎.
- 稲葉 稜 (1994) ガズナ朝の王都ガズナについて『東方学報』66, 252 - 200.
- 稲葉 稜 (1999) イスラーム教徒のインド侵入『岩波講座世界歴史』6 岩波書店, 157 - 180.
- 伊藤徳男 (1935) 魏略の製作年代に就いて『歴史学研究』4 (1), 69 - 72.
- 岩井俊平 (2002) アム川南北の交流『第9回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会』, 9 - 15.
- 岩井俊平 (2003) ポスト・クシャーン期バクトリアの土器編年『西アジア考古学』4, 41 - 54.
- 岩井俊平 (2004) トハリスターンにおける地域間関係の考古学的検討『西南アジア研究』60, 1 - 18.
- 岩井俊平 (2005) ヒンドゥー・クシュ南北における土器組成の比較『西アジア考古学』6, 29 - 39.
- Konow, S. (1929) *Kharosthī Inscriptions with the exception those of Aśoka. Corpus Inscriptionum Indicarum II-i, Calcutta*.
- Konow, S. (1932) Kalawān Copper-plate Inscription of the Year 134. *JRAS*, 949 - 965.
- 桑原隲蔵 (1916) 張騫の遠征『続史的研究』(『東西交通史論叢』弘文堂書房, 1 - 117 所収).
- 桑山正進 (1981) 迦畢試国編年史料稿 (上)『仏教芸術』137, 86 - 114.
- 桑山正進 (1987) 『大唐西域記』(訳注) (大乘仏典中国・日本篇9) 中央公論社.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所.
- 桑山正進 (2003) 仏像出現ごろのタキシラ —— 層位と編年 —— 『東方学』106, 1 - 20.
- Laufer, B. (1919) *Sino-Iranica*. Chicago.
- Lazard, G., F. Grenet & C. Lamberterie (1984) Notes Bactriennes. *SIr* 13 (2), 199 - 232.
- Лившиц, В. А. & И. Т. Кругликова (1979) Фрагменты бактрийской монументальной надписи из Дильберджина. Древняя Бактрия, вып 2, Москва, 98 - 112.
- Lüders, H. (1961) *Mathurā Inscriptions*. Göttingen.
- Lüders, H. (1973) *List of Brāhmī Inscriptions from the Earliest times to about A. D. 400 with the exception of those of Aśoka*. Varanasi.
- MacDowall, D. M. & M. Taddei (1978) The Pre-Muslim Period. In : Allchin, F. R. & N. Hammond (ed) *The Archaeology of Afghanistan*. Academic Press, 233 - 299.
- 間野英二 (1977) 『中央アジアの歴史』講談社.
- 間野英二 (1999) 中央アジアのイスラーム化 間野英二 (編) 『アジアの歴史と文化』8 同朋舎, 82 - 93.

- Mariq, A. (1958) La Grande Inscription de Kaniška et l'éteo-tokharien l'ancienne langue de la Bactriane. *JA* 246, 345-440.
- Marshall, J. (1951) *Taxila: An Illustrated Account Archaeological Excavations I-III*. Cambridge.
- 松田寿男 (1939) 禺氏の玉と江漢の珠『東西交渉史論』上, 157-186.
- Mitchiner, M. (1975) *Indo-Greek and Indo-Scythian Coinage 4: Contemporaries of the Indo-Greeks*. Hawkins Publications.
- 宮治 昭 (1996) 『ガンダーラ 仏の不思議』講談社.
- 宮治 昭 (1997) 仏像の起源に関する近年の研究状況について『大和文華』98, 1-18.
- 村川堅太郎 (1946) 『エリュトラー海案内記』生活社.
- 中務哲郎 (1986) 『プトレマイオス地理学』(訳) 東海大学出版会.
- 小谷仲男 (1996) 『ガンダーラ美術とクシャン王朝』京都大学学術出版会.
- 小谷仲男 (1999) 『大月氏』東方書店.
- Pulleyblank, E. G. (1983) Stages in the transcription of Indian words in Chinese from Han to Tang. In: Röhrborn, K. & W. Veenker (eds) *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*. Wiesbaden, 73-102.
- Pulleyblank, E. G. (1991) *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver.
- Rosenfield, J. M. (1967) *The Dynastic Arts of the Kushans*. Los Angeles.
- 定方 晟 (1988) セーナヴァルマ刻文の研究『東洋学報』69 (1・2), 186-159.
- 定方 晟 (1990) マトゥラー刻文の和訳(Ⅱ)『東海大学紀要: 文学部』54, 31-1.
- 定方 晟 (1997) 碑文でわかったインド古代史(1)『印度哲学仏教学』12, 26-45.
- Salomon, R. (1974) The Kṣatrapas and Mahākṣatrapas of India. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 18, 5-25.
- Salomon, R. (1982) The 'Avaca' Inscription and the origin of the vikrama era. *JAOS* 102, 59-68.
- Salomon, R. (1986) The Inscription of Senavayrma, King of Odi. *IJ* 29, 261-293.
- Salomon, R. (1998) *Indian Epigraphy*. Oxford.
- Salomon, R. (1999) *Ancient Buddhist Scrolls from Gandhāra. The British Library Kharoṣṭhī Fragments*. Washington.
- Salomon, R. (2003) Three Kharoṣṭhī Reliquary Inscriptions in the Institute of Silk Road Studies. *Silk Road Art and Archaeology* 9, 39-69.
- 佐藤 長 (1958) 『古代チベット史研究』上 同朋舎.
- Schwartzberg, J. E. (1992) *A Historical Atlas of South Asia*. Oxford.
- Simonetta, A. M. (1978) The Chronology of the Gondopharean Dynasty. *EW* 28, 155-188.
- Sims-Williams, N. (1989) Bactrian. In: Schmit, R. (ed) *Compendium Linguarum Iranicarum*. Wiesbaden, 230-235.

- Sims-Williams, N. (1992) *Sogdian and other Iranian Inscriptions of the Upper Indus 2*. London.
- Sims-Williams, N. (1998) Further notes on the Bactrian inscription of Rabatak ; with an appendix on the names of Kujula Kadphises and Vima Taktu in Chinese. In: Sims-Williams, N. (ed) *Proceedings of the third European Conference of Iranian Studies 1*. London, 79-92.
- Sims-Williams, N. (2000) *Bactrian Documents I*. Oxford.
- Sims-Williams, N. (2002) Ancient Afghanistan and its invaders-Linguistic evidence from the Bactrian documents and inscriptions-. In: Sims-Williams, N. (ed) *Indo-Iranian Languages and Peoples*. Oxford, 225-242.
- Sims-Williams, N. & J. Cribb (1996) A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great. *Silk Road Art and Archaeology* 4, 75-142.
- 白鳥庫吉 (1912) 西域史上の新研究 (第2回) 『東洋学報』 2 (1), 1-27.
- 部 勇造 (1976) 『エリュトラー海案内記』の成立年代について —— 古代南アラビア碑文を史料としての一考察 —— 『史学雑誌』 8 (1), 1-37.
- 部 勇造 (1988) 再び『エリュトラー海案内記』の成立年代について 『榎博士頌寿記念東洋史論叢』, 209-232.
- 部 勇造 (1997) 新訳『エリュトラー海案内記』 『東洋文化研究所紀要』 132, 1-30.
- 部 勇造 (1999) インド諸港と東西貿易 『岩波講座世界歴史』 6 岩波書店, 133-156.
- 静谷正雄 (1978) タキシラ銀板巻物銘文の提起する諸問題 —— クシャーン仏教研究 覚え書きの1 —— 『東洋史苑』 12, 15-24.
- 杉山正明 (1997) 『遊牧民から見た世界史』 日本経済新聞社.
- 高田 修 (1967) 『仏像の起源』 岩波書店.
- 塚本啓祥 (1996) 『インド仏教碑銘の研究』 I 平楽寺書店.
- 塚本啓祥 (2003) 『インド仏教碑銘の研究』 III 平楽寺書店.
- Тургунов, Б. А., В. А. Лившиц & Е. В. Ртвеладзе (1981) Открытие бактрийской монументальной надписи в Айргаме. *Общественные науки в Узбекистане* 3, Ташкент, 38-48.
- 内田吟風 (1938) 月氏のバクトリア遷移に関する地理的年代的考証 (上・下・補) 『東洋史研究』 3 (4・5・6), 293-320, 401-423, 521-525.
- 内田吟風 (1972) 吐火羅国史考 『東方学会創立二五周年記念東方学論集』 東方学会, 91-110.
- Vaissière, É. (2004) *Histoire des marchands Sogdiens*. Collège de France.
- 山本光朗 (1999) カローシュティ-文書 №582 について 『北海道教育大学紀要 (人文科学・社会科学編)』 50, 31-40.
- 山田明爾 (1975) インダスからバミールへ 『アジア仏教史』 5 佼成出版社, 25-94.
- 山田信夫 (1985) 『草原とオアシス』 講談社.
- 山崎利男 (1999) カニシュカ 1 世の年代をめぐる新研究紹介 『中央大学アジア史研究』 23, 56-21.
- 吉田 豊 (1992) バクトリア語 『言語学大辞典』 3 三省堂, 111-115.

- 吉田 豊（1997）ソグド語資料から見たソグド人の活動『岩波講座世界歴史』11 岩波書店, 227 - 248.
- 吉田 豊（1999）中央アジアオアシス定住民の社会と文化 間野英二（編）『アジアの歴史と文化』8 同朋舎, 42 - 54.

（龍谷大学大学院文学研究科）